

平成28年産米の営農計画を再確認しましょう。 〈種子・生産資材などの申込はお早めをお願いします〉

平成28年産米の播種時期となりました。現在、圃場整備区域では震災以降5年ぶりに営農再開する地域もあり、4月中旬～5月上旬頃までに水田の引渡しができるよう工事が進められています。耕作する「一時利用地」の調整により地番・面積が確定されていない区域もありますので、営農計画を再確認して頂きますよう宜しくお願いします。

◎気象情報 (仙台管区气象台 3月3日発表の予報より)

予想される向こう1か月の天候については、東北太平洋側では平年に比べ晴れの日が少ない見込みです。また、気温は平均より高い確率が60%、日照時間は平年並みまたは少ない確率ともに40%、降水量は平年並みまたは多い確率が40%です。

<向こう3か月の気温、降水量の各階級の確立 (%) >

【気温】(東北地方)			【降水量】(東北地方)				
3月	20	40	40	3月	20	40	40
4月	20	40	40	4月	30	40	30
5月	20	40	40	5月	40	30	30

凡例：■ 低い(少ない) ■ 平年並 ■ 高い(多い)

<向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確立 (%) >

【気温】東北地方	20	30	50
【降水量】東北地方	20	40	40
【日照時間】東北太平洋側	40	40	20

凡例：■ 低い(少ない) ■ 平年並 ■ 高い(多い)

<気温経過の各階級の確立 (%) >

1週目 東北地方	10	10	80
2週目 東北地方	20	40	40
3～4週目 東北地方	20	40	40

凡例：■ 低い ■ 平年並 ■ 高い

稲作講座の開催について

開催日 平成28年3月29日(火) 午前10時00分～
場所 JA名取岩沼 本店三階 大会議室
内容 仮) 平成27年産米の生育概要と今後の対策について
講師 全農宮城県本部 米穀部
仮) 水稻育苗の留意点とほ場整備後の施肥体系について
講師 亘理農業改良普及センター



◎水稻育苗期の病害対策

イネばが苗病については、県内各地で増加傾向であり、管内でも発生が見受けられました。昨年発生が見られた方は種子消毒の確実な実施と伝染源となる籾殻や稲わらを除去し、作業場、ハウス等の清掃を徹底しましょう。

また、発病苗は健全な苗への伝染源となりますので早期に抜き取りを徹底して下さい。

<慣行栽培 (JA米) >

種子消毒薬剤 ⇒ モミガードC水和剤 又は テクリードCフロアブル

主な使用時期 ⇒ 種もみを浸種(水づけ)前に『200倍液に24時間種子浸漬』

※化学合成農薬を使用した場合、本田のイネばが苗病の発生はほとんど認められない。

<特別栽培米 (環境保全米) >

品種「ひとめぼれ」「ササニシキ」「つや姫」となります。

①温湯消毒実施 ⇒ 60℃のお湯に10分間、速やかに水で種もみを冷やして脱水をしてから各農家へ配達しております。(水づけ開始)

②生物農薬を催芽時に使用 ⇒ 催芽時に『200倍液に24時間種子浸漬』

◎タフブロック剤の使用に関する注意事項

- ・使用時期を確認して、希釈倍数、使用方法を間違えないこと。
例 ⇒ 乾燥籾20kgの場合は、【水20ℓ】に対して【薬剤100g】の希釈
- ・処理後、黄色になる特徴があります。
- ・箱処理剤は、播種同時処理をしないで下さい。(田植前に散布すること。)
- ・ダコレート剤、ベンレート剤など使用できません。(効果が劣る)
- ・生菌剤なので開封したら使い切ることを。

イネばが苗病は、①温湯消毒、②タフブロックを実施した場合、軽減対策になりますが、昨年発生が見受けられた場合は化学農薬の使用をお勧めします。

※環境保全米栽培は次年度以降に防除体系の変更を検討して参ります。

苗立枯病については、極端な高温や低温、ハウス内の過湿条件などにより発病する可能性が高いため、適正な温度管理、水管理を心がけて下さい。

※ハウス内の温度 ⇒ 昼間 20～25℃、夜間 10℃程度

予防剤 タチガレエースM液剤 (播種時1000倍液を1箱当たり1ℓ散布または緑化期に500倍液を1箱当たり500cc散布)

環境保全米栽培 ⇒ タチガレン液剤 (出芽後500倍液を1箱当たり500cc散布)

◎種子消毒について



- ひとめぼれ・まなむすめの目安として水温が10℃で12日間、15℃で8日間程度であるが**10℃くらいのやや低い温度でゆっくり浸種した方が催芽・出芽の揃いは良い。**
- 水の交換は**1～2日ごとに行なう。籾袋の上下交換を行い、吸水の均一化を図る。**

◎播種

低温等による障害や育苗日数の長期化による老化苗等の問題が生じるため、必要以上に早播きにしない。

育苗方法	育苗日数(日)	播種量 (g/箱)	
		乾籾	催芽籾
加温出芽稚苗	20～25	150g	180g
無加温出芽稚苗	20～30	160g	195g

◎育苗期間中の管理

育苗様式別目標値

項目	稚苗	中苗
草丈 (cm)	10～15cm	13～18cm
第1葉鞘高 (cm)	3～4cm	2～3cm
葉数 (葉)	2.1～2.5葉	3.5～4.0葉

表1 平成25年の巡回調査(本田)における種子消毒方法別のばか苗病発生状況

※ 調査時期：平成25年6月第6半旬～7月第1半旬
調査株数：1000株

種子消毒方法	本田での発生			発生ほ場割合 (%)	最大発病株率 (%)
	有り	無し	計		
化学合成農薬	0	6	6	0	0
温湯浸漬	6	39	45	13.3	12.7
生物農薬	1	8	9	11.1	5.3

育苗巡回調査(表1)におけるばか苗病の発生状況

年次	発生地点率 (%)	平均発病箱率 (%)	箱当たり発生程度
平成27年	43.6	0.68	少
平成26年	43.6	0.63	少
平年	26.7	0.77	—

※平年は過去10年の平均値

- ばか苗病及び苗立枯病は発生してからの防除では十分抑えきれません。適正な温度管理、水管理を実施して、発生増加を防ぎましょう。

～圃場整備区域における水稻栽培の留意点について～

震災以降、農地災害復旧工事（除塩）及び圃場整備工事により、一部の地域を除き平成28年産米の作付が可能となりますが、引渡時期が4月中旬から5月上旬となる予定です。一般的に圃場整備後の水田は表土を動かして工事を行うことから地力窒素が多くであることが想定されます。

圃場整備後の施肥については、一度水稻作付を行わないとそのほ場の特徴等が分からないこともありますが、無肥料ではなく基肥量（窒素成分）を減らして計画して頂きますようにご留意願います。

圃場整備後の一般的な肥培管理について(想定される影響)

工事により切土（地力が低くなる）、盛土（地力が高くなる）など、地力窒素の出方に差が生じることが想定されます。（リン酸・カリ成分は施用するようにしましょう。）

また、震災前に元々水田の地力が高い圃場などでは、密植すると倒伏が起こりやすいので、疎植栽培を行いましょう。

(1) 砂質土壌(灰褐乾田)または客土に山土を使用しているほ場(主に沿岸部等)

- ・ほ場の地力窒素は低いと考えられます。
- ・一定以上の地力窒素が出ると想定されるので、基肥を通常の20%程度減肥する。

(2) 灰色低地土～グライ土(半湿水田等)のほ場(主に丘陵～平野地域等)

- ・ほ場の地力窒素は中程度と考えられます。
- ・比較的多くの地力窒素が出ると想定されるので、基肥を通常の20%～50%程度の減肥する。

(3) 黒泥・泥炭土のほ場(平野地域等)

- ・ほ場の地力窒素はやや高いと考えられます。
- ・極めて多くの地力窒素が出ると想定されますが、客土をして嵩上げしているほ場は基肥を50%程度の減肥する。

※但し、均平化しただけのほ場は、下層からも多くの地力窒素が供給される可能性がありますので70%程度減肥する。(基肥一発肥料は使用しない。)

◎主な慣行栽培の施肥(普通栽培 窒素成分で4.5～5.0kg目安)

◎ひとめぼれ専用肥料2号 窒素12% - リン酸22% - カリ20%
施肥量 40kgの場合 4.8kg - 8.8kg - 8.0kg → 減肥の検討

◎高度化成555 窒素5% - リン酸25% - カリ25%
施肥量 50kgの場合 2.5kg - 12.5kg - 12.5kg → 転作跡地の施肥例
※窒素を50%減肥して、リン酸、カリを施用したい場合。